

## 過去を表象するということ

——リクール『記憶・歴史・忘却』における「代理表出」概念——

東京大学 山野弘樹

### はじめに

歴史はいかに物語られるのか。この問題は、20世紀に巻き起こった暴力の歴史を語り継ぐという責任について考える際に取り組むことになる根本問題の一つである。この問題に対して、例えばカルロ・ギンズブルクやテッサ・モーリス・スズキ、さらにはヘイドン・ホワイトといった歴史家たちが一連の論考を提出し、多くの論争を巻き起こしてきた<sup>(1)</sup>。フランスの哲学者ポール・リクールもまた、自らの著作の中で歴史家の責務（すなわち歴史記述の営み）をめぐる哲学的考察を行なった人物の一人である。例えば、歴史記述とフィクションの相関関係について論じた『時間と物語』（1983-85年）や、記憶と歴史の問題系を論じた『記憶・歴史・忘却』（2000年）などはその代表例である。歴史記述に伏在する認識論上の難問に肉薄したリクールの著作は、戦争の記憶が薄れつつある今日においてこそ読まれる価値があると言えるだろう。

しかし、実際のところ、リクールが歴史記述の特質をいかなるものとして捉えていたのかという点を理解することは容易ではない。その主な原因の一つは、リクールが歴史記述論を展開するとき用いる「代理表出（*représentance*）」という語の理解が困難であることに由来する。リクールは『時間と物語』の中で、代理表出こそが「痕跡による認識 [= 歴史学的認識] に特有の間接的指示」（TR III, 204）を特徴づけると述べているが、一体「間接的」とはどういうことなのだろうか。さらにリクールは『記憶・歴史・忘却』第二部第三章第四節「代理表出」の中で、モデル（過去）に対するコピー（歴史記述）という図式を否定している（cf. MHO, 365）のであるが、それでは、歴史記述と過去の間の関係性を、私たちはいかなるものとして理解すればよいのか。代理表出という語が指し示す事態を明らかにしない限り、私たちはリクールの歴史記述論を具体的な仕方で理解することはできないであろう。

管見の限り、これまでのリクール研究においても、リクールの代理表出の内実に踏み込んだ議論は十分になされてこなかったように思われる。例えばヨハン・ミシェルは「「代理表出」の難問」と題された2013年の論文の中で、『時間と物語』から『記憶・歴史・忘却』へと至る歴史記述論の変遷（とりわけ実在論的志向への変化）を論じているが、『記憶・歴史・忘却』と『時

間と物語』の間の連続性を確固たるものにする概念」<sup>(2)</sup>としての代理表出の内実を詳らかにできているとは言えない。また、佐藤啓介は代理表出を「歴史叙述の対象指示性のアポリアを解決するために導入された概念」<sup>(3)</sup>と説明し、川口茂雄は「過去を表象＝代理すること」<sup>(4)</sup>と説明しているのであるが、両者の議論は、共に（芸術作品論において展開される）「存在の増加」というリクルールの議論と代理表出概念が関連しているという点を示唆するに留まっ  
てしまっている。こうした先行研究の状況を踏まえつつ、本稿においては、リクルールの代理表出概念を検討することを通して、『時間と物語』から『記憶、歴史、忘却』へと至る歴史記述論の発展の諸相を明らかにすることを目指す。

本稿の構成は以下の通りである。まず第一節において、『時間と物語』における代理表出の概念を明らかにするべく、『時間と物語』の歴史記述論を三つの論点に整理した上で分析する。次に第二節においては、「ミメシスの循環」の視座を導入することを通して、『記憶・歴史・忘却』における「対象 - 表象」の概念を検討する。最後に第三節においては、対象 - 表象と対をなす「操作 - 表象」の概念を検討することを通して、『記憶・歴史・忘却』における代理表出の議論を明らかにする。これら一連の議論を通して、本稿はリクルールの歴史記述論の理論的発展の内実を明らかにすることを目指す。

## 1. 『時間と物語』における「代理表出」概念

まずは、『時間と物語』における代理表出概念の規定を確認するところから議論を始めたい。

[代理表出の] 機能は、痕跡による認識 [= 歴史的認識] に特有の間接的指示を特徴づけ、歴史が過去を指示する仕方を、他のあらゆる指示から区別する。(TR III, 204)

この引用において、代理表出の機能こそが（過去を指示するという）歴史記述の独自性を構成すると言われている。しかし、〈歴史記述が過去を代理表出する〉というリクルールの着想は、当然のことながら、『時間と物語』において論じられる歴史記述論全体の文脈の中で理解されなければならない。そのため、私たちは先行研究の分析を手がかりとしつつ<sup>(5)</sup>、『時間と物語』における歴史記述論の核となる三つの論点を検討していくことにしよう。

一点目。リクルールが自らの歴史記述論において退けるのは、次の二つの立場である。一つは、史料の中に過去の事実が眠っており、歴史家はそれを発見しさえすればよいという極端な実証主義の立場である。そしてもう一つは、

歴史とは文学的な構築物に他ならず、歴史家は小説家と同じ想像力を用いながら過去を構築していると主張する反実証主義の立場である。歴史記述と過去の間の同一性を強調する前者の立場も、両者の間の差異性を強調する後者の立場も、リクールにとっては一面的である（cf. TR I, 124）。

二点目。こうした二つの立場を退けるリクールが提示するのは、歴史記述がある種の文学的な構築物であることを認めつつも、それによって過去が間接的に表現されるということ肯定する立場である。こうした立場をリクールが提出せざるを得ない背景には、過去の存在論的身分をめぐる次のような考察がある。過去とは、もはや存在しないが、かつては存在したという意味で、存在と非存在の両義的な性質を持つ対象である。確かに、過去がもはや存在しない以上、私たちは歴史記述と実際の過去を見比べるという仕方で、その模写の忠実性を判定するということはできない。しかしリクールは、過去がかつて存在したという事実がある以上、何らかの仕方で過去を記述する必要があると主張する。それが、歴史学的な史料の制約の中で、過去が実際に起こったかのように表現するという立場である（cf. TR III, 225）。こうしたリクールの立場は、「のように」（類似）という留保を常に想定しながら過去を語ることを通じて、過去の両義的な性質を両義的なままに捉えようとするものである<sup>(6)</sup>。

三点目。さらに、こうしたリクールの歴史記述論が有する倫理的含意を見逃すことはできない。リクールは過去を「表現する（rendre）」という言葉に、「返すべきものを取り戻させる（rendre son dû）」（TR III, 220）という意味合いを含み込ませている。リクールにとって歴史記述とは、歴史の犠牲者となってしまった過去の他者たちに対して、その失われた声や姿を取り戻させるという責任を有するものである。すなわち、現在まで生き延びている歴史家たちは、すでに存在しない他者たちに代わって過去を表現し、その失われた声や姿を取り戻させるという責務を有している——少なくともリクールはそのように考えているのだ。確かに、過去の当事者ではない以上、後世を生きる歴史家たちは、〈あくまで実際に起こったかのように〉という留保の中で過去を表現するほかはない。だが、その後の時代を生き延びているからこそ、歴史家たちが過去の「代理（lieutenance）」（TR III, 149）としての歴史記述を生み出すことができるということもまた事実であろう<sup>(7)</sup>。

そして、これまで論じてきた『時間と物語』の歴史記述論の要諦を踏まえることで、私たちは『時間と物語』における代理表出概念の内実を明らかにすることができる。まず、歴史学的認識が有する「間接的指示」とは、残された史料の制約に従いつつ、「おそらくその事態は、以下に述べる〔歴史記述

の]物語の中で語られるように (*comme*) 生じたのであろう」(TR III, 224) という留保を付すことで、(存在と非存在という) 両義的な性質を持つ過去を表現せんとする代理表出の機能を表すものである。そしてそうした機能を有する歴史記述がその他の言述 (例えば『失われた時を求めて』や『魔の山』といった詩的・フィクション的な言述) から区別されるのは、歴史記述のみが、過去の他者たちに代わって、その失われた姿を取り戻させるという責務を有するからである。こうした歴史記述の特質を、リクールは『時間と物語』において代理表出という概念のもとに表していたのであった。

しかし、ここで私たちは、『時間と物語』におけるリクールの歴史記述論には不徹底な点があることを指摘しなければならない。それは、(かつて存在したがもはや存在しないという) 過去の両義性を慎重に捉えなければならないと主張したリクール自身が、『時間と物語』においては、もはや存在しない (すなわち決定的に過ぎ去ってしまった) という過去の非存在の側面を強調しているように思われるという点である。実際、『時間と物語』の歴史記述論においては、過去を表象する主体は専ら歴史家に留まっており、〈過去の主体がいかに世界を認識していたのか〉という点に対する分析はほとんどなされていない (cf. TR I, 289)。そうした『時間と物語』の傾向性は、過去の主体による証言よりも、その決定的な過ぎ去りを示す痕跡の方に議論の力点が置かれている点からも見出すことができるだろう (cf. TR III, 177)。しかし、両義的な性質を持つ過去を代理表出するためには、〈過去を生きた他者たち自身は、どのように現実を認識していたのか?〉という点を具体的に分析しなければならないはずである。そして、こうした理論的な問題に応答するという役割を、『記憶・歴史・忘却』の歴史記述論は担っているのである。次節からは、その点について見ていきたい。

## 2. 『記憶・歴史・忘却』における「対象 - 表象」の契機

本節および次節において、私たちは『記憶・歴史・忘却』における代理表出の議論を検討していきたい。まずは、歴史記述の営みについて論究されている次の引用から議論を始めていくことにしよう。

歴史学をする者としての歴史家は、歴史を学問的なディスカールの水準に引き上げながら、解釈的な身振りを創造的な仕方においてミメシスするのではないだろうか? すなわち、歴史を作る男女たちが、それによって自分自身や自分たちの世界を理解しようと試みるための解釈的な身振りを、である。[…] 歴史学をする契機としての操作 - 表象

(*représentation-opération*) と、歴史を作る契機としての対象 - 表象 (*représentation-objet*) との間には、ミメシス的な関係がある。(MHO, 295)

この引用箇所においては、「対象 - 表象」と「操作 - 表象」という新たな概念を見出すことができる。これらの概念は、過去を表象せんとする代理表出の営みと密接な連関を有する概念である。そのため、本節においては対象 - 表象の概念を、そして次節においては操作 - 表象の概念を検討することを通して、『記憶・歴史・忘却』における代理表出の議論を明らかにすることを試みる。

対象 - 表象とは「社会的な行為主体の表象的实践」(MHO, 343) を指す言葉であり、川口の表現を借りれば、「過去の社会的行為者たちが表象する表象」<sup>(8)</sup> のことである。ここで着目したいのは、かつて存在した行為主体という観点に焦点が当てられていることである。対象 - 表象の概念において問題となるのは、まさに行為主体としての過去の他者たちの振る舞いである。こうした振る舞いを分析する為に、リクールはアナール学派の歴史家たち（主にロジェ・シャルティエ、ベルナール・ルプティ、ジャック・ルベル）、さらにはルイ・マランからいくつかの概念群を取り入れている。本節においては、対象 - 表象の内実をより具体的に分析する為にも、その中から次の二つの概念を取り上げたい。すなわち、「我有化 (*appropriation*)」および「イニシアティブ」の二つである。

我有化とは、テキストにおいて展開される世界を読解し、そこにおいて提示される諸価値を実現せんとする作用のことを指す (cf. TR I, 83; TR III, 261)。そしてテキストを我有化する主体は、『時間と物語』においては限定されておらず、その適用範囲は理論的に開かれていた。しかし、『記憶・歴史・忘却』においては、明確に過去の主体が発揮する力能として我有化の概念が割り当てられている。リクールはルベルの議論を引き合いに出しつつ、過去の人々が（テキストにおいて明示される）価値や規範といった社会的な諸要素を取り込み、それらを作り替えていく事態を指摘している (MHO, 283)。また、シャルティエと共にリクールも、過去の人々による読書の営み（すなわち我有化）が、単なる受容ではなく、一つの創造的な表象的实践に他ならないと主張している (MHO, 295)。ここにおいて見出されるのは、『記憶・歴史・忘却』においては、我有化の概念がかつて存在した行為主体を分析するための視座として用いられているという点である。

これと同様の事態を、イニシアティブの概念についても見出すことができ

る。簡潔に述べるならば、出来事の流れに新しい始まりをもたらすという力がイニシアティブである。この時点においてイニシアティブの概念は、とりわけ他者に対する約束や責任という倫理的・政治的な側面が強調されていた（TR III, 335, 338; TA, 300, 301）。言い換えると、『時間と物語』においてイニシアティブの力を発揮できる主体として想定されていたのは、主として現在生きている主体であったのである。しかし、『記憶・歴史・忘却』においては、かつて存在した他者たちに対してイニシアティブの概念が割り当てられている（cf. MHO, 291-292）。すなわち、イニシアティブ概念に関してもまた——その倫理的・政治的な含意が背景に退く仕方——かつて存在した行為主体の在り様を分析するための視座として用いられているのである。

こうした視座は、『記憶・歴史・忘却』の歴史記述論において新規に付け加えられた要素である。前述したように、『時間と物語』において過去の主体の能動性はほとんど吟味されず、歴史を表象する主体は専ら歴史家に限定されていた。しかし『記憶・歴史・忘却』においては、もはや存在しない過去の不在者の認識に肉薄するための理論的展開が試みられているのである。すなわち、ある出来事の解釈や、価値・規範などを創造する過去の人々の表象（すなわち歴史記述の対象）こそが、対象 - 表象であると言えるだろう。

それでは、一体いかにしてリクールは、対象 - 表象の概念を導き出す視座を獲得したのだろうか。こうした視座の獲得は、『記憶・歴史・忘却』において突然なされたわけではない。その理論的な萌芽は、『時間と物語』における「三重のミメーシス論」の中に見出すことができる。非常に簡潔に述べるならば、三重のミメーシス論とは、行為を実践する「ミメーシス 1」、物語を構成する「ミメーシス 2」、物語を受容する「ミメーシス 3」という三つの局面から構成される循環関係に関する議論である。続けて、〈歴史記述論へのミメーシスの循環の導入〉という事態を検討していきたい<sup>(9)</sup>。

ここでポイントになるのはミメーシス 3 の議論である。ミメーシス 3 とは、テキストを読解することを通して自己を理解するという局面である。例えば人は、フィクション作品を受容することを通して、これまでの自分の経験を遡及的な仕方理解しなおしたり、これからの人生の在り方について思いを巡らせたりする。このように、読書を通して自己に対する反省が引き起こされるという意味で、読書は新たな自己理解を人にもたらすものである。そして、新たな自己理解が生じることによってこそ、人はそれまでとは別様の行動を実践することができる。だからこそ、テキストを読解するミメーシス 3 の営みは、実践の領域（すなわちミメーシス 1）に向かって循環すると言われるのである<sup>(10)</sup>。

さて、こうした三重のミメーシス論が『記憶・歴史・忘却』へと導入されることを通して、かつて存在した過去の不在者へアプローチする方途が見出されることとなる。前述したように『記憶・歴史・忘却』においては、我有化やイニシアティブの概念がかつて存在した他者を分析するための視座として用いられていた。そして、〈出版物などのテクストを読解した上で、それを日常生活の実践へと繋げる〉という循環関係は、まさに〈ミメーシス3からミメーシス1へ〉という三重のミメーシスの循環と軌を一にするものである。かくして、読書を通じた自己変容を行う過去の他者たちの解釈的な身振りを、シャルティエはリクールから影響を受けつつ「読書の歴史」において描き出したのであり<sup>(11)</sup>、そして、そのようにして生み出されたシャルティエの歴史学的成果を、今度はリクールが『記憶・歴史・忘却』において再輸入したのである(MHO, 295)。繰り返しになるが、『時間と物語』においては、過去の他者たちはあくまで過ぎ去ってしまった不在者に他ならず、〈もはや存在しない〉という消極的な性格ばかりが強調される傾向にあった。しかし、過去の他者たちを〈ミメーシスの循環を生きる主体〉として理解することを通してこそ、もはや存在しない過去の不在者へアプローチし、〈かつて存在した〉というその積極的な性格を代理表出するための出発点が切り開かれるのである<sup>(12)</sup>。

### 3. 『記憶・歴史・忘却』における「操作 - 表象」の契機

さて、前節においては対象 - 表象の契機に関する検討を行った。本節においては、それと対になる「操作 - 表象」概念の検討を行うことを通して、『記憶・歴史・忘却』における代理表出の議論の解釈を試みる。

まずは、操作 - 表象の概念に対してリクールがどのような規定を与えていたのかを確認するところから議論を始めたい。操作 - 表象とは、「社会的行為者の表象を自らに表象する歴史家のディスクール」(MHO, 343)であると述べられている。こうした規定は、一見、歴史記述に関する常識的な理解を反映しているだけのようにも見える。しかし、過去の「表象(représentation)」とは同時に過去の「再 - 現前(re-présentation)」でもあるということを想起するならば、こうした操作 - 表象に関する説明自体が、むしろ解釈されるべき対象であると言わねばならないだろう。なぜなら、過去を再現前化されると言われる歴史記述の機能それ自体が明らかにされねばならないからである。それでは、いかにして操作 - 表象の内実を解釈することができるのか。

ここで再び、私たちは第二節において引用した文章に立ち返ろう。そこにおいては、操作 - 表象と対象 - 表象との間に「ミメーシス的な関係」がある

と述べられていた。リクールがアリストテレスの『詩学』から着想を得て、『生きた隠喩』（1975年）の時期から幾度となく中心概念として用いてきた「ミメーシス」の概念が、ここでも登場するのである。そのため私たちは、ここでリクールが述べているミメーシス概念の内実を解釈することを通して、操作 - 表象の概念に迫ることにしたい。

第二節において、私たちは三重のミメーシス論に関する検討を行ったが、ここにおいてポイントになるのは、その中におけるミメーシス 2（すなわち物語の創作）の局面である。もともとリクールは『生きた隠喩』において、隠喩に代表される詩的テクストが現実を再記述する力を有している（例えば「時は金なり」という隠喩表現は、時間を金として捉えることで、私たちの日常的な現実理解を刷新する力を持つ）という議論を展開していた（cf. MV, 308）。それこそが、隠喩による現実の創造的なミメーシス（再現・表象）である<sup>(13)</sup>。そして、こうした隠喩に関する考察を物語にまで拡張したのが『時間と物語』であり、そこにおいてリクールは、フィクション作品を代表とする物語が現実を再構成する力を有していると主張する（cf. TR I, 121）。すなわちフィクション作品は、現実からは切り離された異質な世界を展開することを通して、人間の生の可能性を探究するものとされるのである。このとき、可能的な現実を表現するフィクション作品（ミメーシスするもの）と、それによって表現される可能的な現実（ミメーシスされるもの）との間には、まさにミメーシス的な関係があると言えるだろう。

現実を再構成するこうしたミメーシスの効力は、フィクション作品において認められるものである。だが、ここで私たちは、リクール自身が歴史記述とフィクション作品を峻別していたことを指摘しなければならない（cf. TR III, 203, 225）。すなわち、フィクション作品によるミメーシスと、歴史記述によるミメーシスとは、互いに異なるものとして整理されねばならないのである。それでは、歴史記述は一体いかにして、過去を創造的に再現する（すなわちミメーシスする）と言われるのであろうか。

ここで大きな手掛かりとなるのが、リクールが代理表出概念に対して詳述した長大な注（MHO, 368）である。そこにおいてリクールは、「モデル」（再現されるもの）と「イメージ」（再現するもの）の関係性について述べている。すなわち、イメージはモデルに依存（*dépendance*）を示す一方で、モデルはイメージによって補償される（*est compensée*）とリクールは主張するのだ（*ibid.*）。そしてリクールは、こうしたモデルとイメージの関係性を、過去と歴史記述の関係性にも当てはめる。つまり、「対象 - 表象」（歴史記述において再現されるもの）がモデルの側に、そして「操作 - 表象」（歴史記述におい



て再現するもの) がイメージの側に位置づけられるのである。このようにリクールの議論を図式的に整理することで得られる『記憶・歴史・忘却』の歴史記述論とは、次のようなものである。すなわち、〈歴史記述の実践としての操作 - 表象〉は、〈過去の人々の表象としての対象 - 表象〉に依存を示すと同時に、またその補償を遂行するのである。

もちろん、「依存」と「補償」という二つの側面に関して、私たちはさらに敷衍する必要があるだろう。操作 - 表象が対象 - 表象に依存するとは、歴史的な証拠の制約の中で過去の物語を語り継ぐという事態を示している (cf. TR III, 204)。リクールが『時間と物語』の頃から一貫して主張しているように、歴史記述とフィクション作品の間の境界線は、史料的立証という外的拘束に縛られているか否かという点に存するのである。それに対して、対象 - 表象が操作 - 表象によって補償されるとは、かつて存在した過去の人々の表象を歴史家が表象することによって、もはや存在しない不在者の姿を取り戻させることを意味している。言い換えれば、リクールにとって歴史家の責務とは、〈歴史上の暴力に晒された過去の他者たちに対する補償〉という内実を含むものなのであり、それを遂行する役割を担うのが操作 - 表象なのである。

ところで、なぜ過去の人々による表象 (すなわち対象 - 表象) を表象することが、もはや存在しない不在者の姿を表現することに繋がるのであろうか。それは、解釈的な身振りを伴いつつ発露する過去の人々の表象が、世界の在り様についての表象のみならず、自らの存在の仕方を理解する自己表象をも含むものだからである。すなわちリクールは、他者による自己表象を理解するという迂回路 (アナル学派による「表象史」の道) を経ることを通して、そうした表象を有した他者の姿を取り戻させるための可能性を提示しているのだ。そして、こうした過去の姿の取り戻しを、リクールは代理表出による過去の「存在の増加 (surcroît)」 (MHO, 369) と形容しているのである。

さて、本節において検討してきた内容を、改めて代理表出の議論として整理してみたい。『時間と物語』において初めて登場した代理表出の概念は、『記憶・歴史・忘却』において明確に、(再現するものである) 操作 - 表象と (再現されるものである) 対象 - 表象の二つに分節された。中でも、歴史記述の対象としての対象 - 表象という着想は、『時間と物語』においては見られないものであった。なぜなら、『時間と物語』においては、かつて存在した過去の他者自身による表象に肉薄するためのアプローチが検討されることはなかったからである。だが、〈過去の主体はいかに世界を認識していたのか〉という視点が欠けている限り、不在者の姿を表現するという代理表出に具体性が伴うことはないであろう。だからこそリクールは、こうした『時間と物語』に

おける理論的な空白地帯を、アナル学派の歴史学的成果を吸収することによって補填することを試みた。すなわち、『記憶・歴史・忘却』における歴史記述論は、代理表出の概念を彫琢することを通して、『時間と物語』において論じられた歴史家の責務（すなわち代理表出の営み）をより実質的な仕方で遂行するための道を切り開く論考であったのである<sup>(14)</sup>。

## 結論

本稿においては、主に次の二つの点を明らかにすることができた。一つは、『時間と物語』において展開されたミメシスの循環という視座が『記憶・歴史・忘却』へと導入されることを通して、かつて存在した過去の不在者へのアプローチ（とりわけ対象 - 表象の定式化）が可能となったという点である。そしてもう一つが、対象 - 表象と操作 - 表象をめぐる一連の議論が導入されることを通して、『時間と物語』において提出された代理表出の概念が彫琢されることになったという点である。こうした議論を通して、私たちは、『記憶・歴史・忘却』の歴史記述論が、過去の不在者の表現を試みるという『時間と物語』の議論をより実質的な仕方で遂行するための道を提示するものであったと結論づけることができよう。

本稿は、リクールにおける代理表出概念を検討することを通して、（『時間と物語』から『記憶・歴史・忘却』へと至る）歴史記述論の理論的進展の内実を明らかにすることを試みるものであった。こうした作業は、これまで先行研究が捉えることのできなかつたリクールの歴史哲学の輪郭を描き出すことに貢献するはずである。

## 注

- (1) 歴史学的認識をめぐる論争に関して、例えばフリードランダー [1992] やモーリス - スズキ [2005]、さらには遅塚 [2010] や川口 [2012] を参照されたい。
- (2) ミシェル [2013, p. 289]。
- (3) 佐藤 [2008, p. 36]。
- (4) 川口 [2012, p. 328]。なお、川口は“représentance”を「代表象化」と訳しつつ、その分析を行っている（pp. 326-331）。
- (5) 山野 [2020a]、とりわけ pp. 245-248 を参照されたい。
- (6) この点について、より詳しくは山野 [2020a, pp. 248-250] を参照され

たい。

- (7) こうした後世の歴史家の役割を重要視するリクールと対をなすのが、証人不在の欠席裁判を断行するものとして歴史記述を批判するエマニュエル・レヴィナスである。詳しくはレヴィナス[1990, p. 48]を参照されたい。
- (8) 川口[2012, p. 326]。
- (9) ジャン・グレーシュも、ミメーシス 3 の契機である「読書」の理論が、『記憶・歴史・忘却』における歴史記述論の中に導入されていることを正しく指摘している[2001, p. 184]。なお、「ミメーシスの循環」に関して、詳しくは北村[2003, pp. 125-133]を参照されたい。
- (10) こうしたリクールの読書論に関して、より詳しくは山野[2020b]（とりわけ p. 183）を参照されたい。
- (11) この点について、詳しくは R・シャルチュエ著、福井憲彦訳『読書の文化史』新曜社、1992 年、p. 11 を参照されたい。なお、読者だけでなく、テキストの朗読を聞く聴衆も、こうしたミメーシスの循環の中で変容する主体として念頭に置かれている。
- (12) こうしたリクールの歴史記述論は、「主体の復権」という史学史の展開（長谷川[2016, p. 107]）と重なるものである。そうした意味で、リクールの歴史記述論は言語論的転回以降の歴史学の動向を先取りするものであったと言える。
- (13) リクールは 1980 年に出版されたアリストテレスの『詩学』の仏訳（ローズリーヌ・デュポン＝ロックとジャン・ラロによるもの）に従い、「ミメーシス」を“*représentation*”と訳出している。したがってリクールが用いるミメーシス（“*représentation*”）とは、文脈に応じて「再現」ないし「表象」とパラフレーズ可能な述語である。
- (14) 本稿において辿ってきたように、リクールの歴史記述論を理解するには、『時間と物語』と『記憶・歴史・忘却』の間の相違点と共通点の双方を検討する必要がある。したがって、グレーシュ[2001, p. 184, 217]のように両者の著作の連続性を指摘するだけでなく、また、ミシェル[2006, p. 200 / 2013, p. 286]のように両者の著作の相違点を強調するだけでもないところに、本稿独自の視座があると言えるだろう。

引用文献略記号

- MV Paul Ricœur, 1975, *La métaphore vive*, Paris: Seuil.  
TR I ———, 1983, *Temps et récit, t.I: L'intrigue et le récit historique*, Paris: Seuil.  
TR III ———, 1985, *Temps et récit, t.III: Le temps raconté*, Paris: Seuil.  
TA ———, 1986, *Du texte à l'action : Essais d'herméneutique II*, Paris : Seuil, 1986; « Point Essais » 1998.  
MHO ———, 2000, *La mémoire, l'histoire, l'oubli*, Paris: Seuil.

※既訳のあるものは適宜参照したが、訳文はすべて拙訳である。また、[] 内において訳者による補足を示した。

文献表

- Chartier, Roger, 1987, *Lectures et Lecteurs dans la France de l'Ancien Régime*, Paris: Seuil.  
Clark, Steven, 1990, *Paul Ricoeur*, London: Routledge.  
Dowling, William, 2011, *Ricoeur on Time and Narrative: An Introduction to Temps et récit*, Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press.  
Friedlander, Saul (ed.), 1992, *Probing the Limits of Representation. Nazism and the «Final Solution»*, Cambridge, Mass., and London: Harvard University Press.  
Greisch, Jean, 2001, *Paul Ricœur. L'itinérance du sens*, Grenoble: éd. J. Million, coll « Krisis ».  
Grondin, Jean, 2013, *Paul Ricœur*, Paris: Presses Universitaires de France.  
Lévinas, Emmanuel, 1990, *Totalité et infini. Essai sur l'extériorité*, La Haye: M. Nijhoff, 1961, coll. « Le Livre de poche ».  
Michel, Johann, 2006, *Paul Ricœur. Une philosophie de l'agir humain (Passages)*, Paris: Cerf.  
———, 2013, « L'énigme de la « représentance » », dans *Paul Ricœur: penser la mémoire*, François Dosse et Catherine Goldenstein (dir.), Paris: Seuil, 277-290.  
Mongin, Olivier, 1994, *Paul Ricœur*, Paris: Seuil.  
Revel, Jacques, 1996, (dirigé par) *Jeux d'échelles. La microanalyse à l'expérience*, Paris: EHESS-Gallimard-Seuil.

- Simms, Karl, 2003, Paul Ricoeur, London: Routledge.
- Morris-Suzuki, Tessa, 2005, *The Past within Us: Media, Memory, History*, London and New York: Verso.
- Vanhoozer, K. J., 1990, *Biblical narrative in the philosophy of Paul Ricoeur: A study in hermeneutics and theology*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wood, David (ed.), 1991, *On Paul Ricoeur: Narrative and Interpretation*, London: Routledge.
- 川口茂雄, 2012, 『表象とアルシーヴの解釈学——リクールと『記憶、歴史、忘却』』京都大学学術出版会.
- 北村清彦, 2003, 『藝術解釈学——ポール・リコールの主題による変奏』北海道大学図書刊行会.
- 越門勝彦, 2007, 『省みることの哲学——ジャン・ナベール研究』東信堂.
- 佐藤啓介, 2008, 「物語の後で——『時間と物語』から見た『記憶・歴史・忘却』」『フランス哲学・思想研究』日仏哲学会, 第13号, 29-38.
- 杉村靖彦, 1998, 『ポール・リコールの思想——意味の探索』創文社.
- 遅塚忠躬, 2010, 『史学概論』東京大学出版会.
- 長谷川貴彦, 2016, 『現代歴史学への展望——言語論的転回を超えて』岩波書店.
- 山野弘樹, 2020a, 「リクール『時間と物語』における「比喩論的アプローチ」——「歴史記述」のフィクション性をめぐって」『哲学』日本哲学会, 第71号, 243-253.
- , 2020b, 「読書行為の存在論——リクール『時間と物語』における「フィクション」論をめぐって」『哲学の門：大学院生研究論集』日本哲学会, 第2号, 176-188.
- R・シャルチエ著, 福井憲彦訳, 1992, 『読書の文化史——テキスト・書物・読解』新曜社.

本論文は、令和元年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費、課題番号19J20389）による研究成果の一部である。